私立望標学園

超電磁ボーイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私立望標学園

【Ｎコード】
Ｎ２６８２Ｑ

【作者名】
超電磁ボーイ

【あらすじ】
望標学園（のぞしめがくえん）でおきる青春ストーリ

プロローグ（前書き）

今回初めての長編です！

プロローグ

「長かったな～3年間、いろいろあったからな～」
桜並木を歩きながら思い出してみる
「あいつら、集めて思い出話するかな！」
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～

キャラ説明その一
主人公
徳岡妄幻（とくおか もうげん）
身長１７０ｃｍ
年齢１５歳
性格　まじめ
得意科目
英語　国語　数学　理科

ヒロイン
徳岡希想（とくおかきそう）
１５５ｃｍ
１４歳
性格　騒がしい
得意科目　体育・保健以外
妄幻の妹でもある

プロローグ（後書き）

次回予告
主人公の妄幻が不思議な腕輪を装備する
新たな環境、新たな仲間

新たな環境、新たな仲間（前書き）

お兄ちゃん！学校行くよ！

新たな環境、新たな仲間

「学校長の言葉、天皇龍次先生お願いします」
ワイルドな男性がマイクを取った
「新入生の諸君！私が校長の天皇だ。お前たちには、これから三年間学生生活が始まる楽しむのもいいが勉学もやってもらう！この後、各クラスで話がある。俺からは以上だ！」
メガネをかけた先生　井口先生が慌てて
「あ、ありがうございました。各クラスの担任は、生徒を連れて移動してください」
井口先生が俺のクラスの担当なので、先生の指示で１－１に移動したクラスの人数は、女子１２人男子１５人の２６人である
「それでは、まず自己紹介しますね」
黒板に、国語科担当　井口野良と書いて
「井口野良です、よろしく」
「皆さん自己紹介してください」
そして俺の番がきた
「徳岡妄幻です、よろしく」
と簡単に紹介をしたのに・・・
「幻兄ちゃんの妹の希想です♪よろしくね！」
クラスがざわついた・・・目線が痛い（幻兄ちゃんだと？なんだアイツ）
ガタン！と教室に響いた
「オイ！クソ妹！何で学校で＜お兄ちゃん＞なんだよ！」
そして妹も
「え～何で駄目なの？」
そしてクラスが固まった
「あ、アレ！？なんか変かな？」
「バカ妹後でじっくり話してやる」

とそこに
「すいませ～ん遅れました」
と短髪の可愛い女子が入ってきた
「自己紹介したら席に座ってくださいね」
「はい！初めまして祈芽羅曲狐です！よろしくね」
と席に座った
全員終わると井口先生が
「これよりＤＢＢの設定をおこないます。川奈君こっちに持ってきてください」
そして一人の女子が変な機械を持ってきた
「これは、ＤＢＢ（Ｄｅｌｕｓｌｏｎ Ｂａｔｔｌ Ｂｒａｃｅｌｅｔ）の略です。これを使ってクラス対抗戦をおこないます」
みんなの顔が固まった
「まず、試しに妄幻君こちらに」
俺が呼ばれた。そうここから俺の青春が大変になった
「はい」
と返事をして機械に近づいた
「そこに右腕を入れて」
指示どうりに手を入れると、スライムのような感触の幕が手の周りぴったりにひっついた。最初が青だったのが黒に変化した
「頭の中で武器のイメージを作り出してください」
作り出したのは、刀　長い刀だ　次の瞬間光だした！
「ｌｌｌっ！」
手に黒い腕輪がついていた
「合い言葉は、友のための犠牲だよ」
「なんですかそれ？」
「武器を出すための言葉だよ。心の中でつぶやいてみなさい」
つぶやいてみた、黒い光が右腕を覆った
腕輪が一回り大きくなり、武器へと変化していく
そこには、１．５ｍの日本刀が現れた

「な、何がおきてるんだ？」

新たな環境、新たな仲間（後書き）

次回予告
ＤＢＢを手に入れた妄幻
練習でのチームで、曲狐と緩奈と希想の４人でやることに
力とカタチ

力とカタチ（前書き）

「な、何がおきてるんだ？」

力とカタチ

みんなの目が俺の日本刀に集中した
「これが、ＤＢＢです。」
そこには、本物みたいな日本刀がある。さっきまで腕輪だったのに
「これが、妄幻君がイメージした武器です。他の皆さんのはまた違う物が出てきます。ちなみにこの武器は、中学3年の成績に影響してます。勉強ができた人は、選べますができなかった人は固定武器です」
それから、主席番号順にＤＢＢを作成していく。そこに
「あなたの武器強そうね」
と先ほど入ってきた緩奈さんが話かけてきた
「そうかな？」
と答えると
「私のに比べるとね」
とそこには、青い腕輪がついていた
「意味は、静かなる闘志よ」
とニコッと笑顔を作るとそこにムチが現れた！長さが４ｍもあるやつである。パシンッ！と音をだして地面に落ちた
「どう？たいしたことないでしょ？」
みんなの目線が緩奈の武器に集中した
「いや・・・そっちの方が強いだろ！」
とそこにパン！パン！の音とともに何かが飛んできた。それを緩奈が
「危ないわよ」
と簡単に落としてみせた
「おにぃ～！これが私の武器だよ♪」
と希想が白と黒の銃をこちらに向けながら歩いてきた
「オイ！殺すきか！」
ぶんぶんと勢いよく首を振ると

「おにぃ～ならそれで落とすと思ったのな～」
と無理難題を言ってきた
「なんか期待はずれだな～つまんないの」
とニコニコしながら曲狐が話しかけてきた
「なんだよ、全部落とせってか？」
「そうそう！」
と無理を普通に言ってきた
とそこに先生が
「皆さん、４人一組のチームを作ってください。これから練習試合をします」
と先生が言ったので
「この４人でいいか？」
と聞くと
「異議なしだよおにぃ～」
「ないわよ」
「なしなし☆」
とみんな言ったので
「先生！この四人でチームつくります！」
「ならリーダを決めてください」
と言われたがみんなの戦闘スキルも知らないのにどうすれば？と考えていると
「君でいいじゃないか、妄幻君」
サンセェ～と二人も勝手に発言したため
「それでは、妄幻君よろしくね」
と先生にも頼まれたので断れなかった
「はい」
と答えた
それから
みんなの武器を確認した
まず、曲狐の武器は、海軍用船上槍（フリウリスピア）である長さは、２ｍもある

次に、緩奈は、ムチで４ｍある、特徴はムチの側面にダイヤモンド
がちりばめられている
次に、希想は、二丁拳銃で白と黒の特徴的な拳銃である。弾数は、
片方４０発の合計８０発である。
最後に、俺である１．５ｍある日本刀である特に特徴は、ない
なんか、俺だけ特にないのだ
「俺リーダー務まるのか？」
『もちろん（よ）（だよん）』
と3人一緒に言い切った
「そうか・・・」
それから、グラウンドに移動した
「これより、クラスリーダー決め試合をおこないます。４人チーム
5つと3人チーム2つでおこないます」
第一回は、鈴木チームＶＳ佐々木チームの試合だった
勝ったのは、佐々木チームだった3人なのに5分で片付けた。
「早いな~勝てるのか？」
と考えてるともう一方の試合も終わった森野チームと金沢チームで
森野チームの勝ちである。
「次だな、相手は野呂チームだな」
相手は、ランスと大剣の組み合わせである
「よし！こっちは、俺と祈芽羅が前で川奈さんと希想が援護な」
と言ったら
「私のこと曲狐ってよんでね☆」
そしたら
「私も、緩奈ってよんでかまわないわよ」
「わかった！いくぞ！緩奈、曲狐、希想」
試合が始まった
まず、敵の槍兵がものすごい勢いで攻めてきた
「避けて大剣をやるぞ！」
「うん！」

二人同時に避けるとそこを槍兵が駆け抜けていって宙に舞って撃たれた
ダダダダダダダダダダダダダダダァァ
「やったよ！」
と希想が元気よく叫んだ
「後任せたわよ」
と緩奈が言った
『任せと（いて）け！』
と言って二人一緒に言った後、二人で相手を一撃で仕留めた
「よし！勝ったぁー！」
「おにぃ～！やったね！」
「やったな、妄幻」
「勝ったね～」
とみんなで勝利を分かち合った
その後、何故か二つのチームが引き分けで俺たちのチームが勝利を勝ち取り
「妄幻君、君が学級委員長だよ。それと緩奈君が副委員員でたのむよ。」
と井口先生に頼まれたので
『はい』
と返事をしといた

力とカタチ（後書き）

次回予告
違うクラスの新たな人に会う妄幻達
この遭遇がどう未来を変えるのか？
新たな仲間

キャラ説明　その他（前書き）

今回は、キャラ説明と用語などです。

キャラ説明　その他

用語

学校名　望標学園　（のぞしめがくえん）

腕輪説明

ＤＢＢ（Ｄｅｌｕｓｏｌｏｎ　Ｂａｔｔｒｅ　Ｂｒａｃｅｌｅｔ）
の略

腕輪のカラー説明

色は、人の心を映したもの

黒
友や大切な人にたいする気持ちの大きい人

赤（ワインレッド）
どんなことにも、あきらめない人

ワインレッド
特に気持ちが強い人

黄
みなに元気をあたえ勇気をもたらす人

白
みなに癒しをもたらし、すべてに平等である人

紫
夢をあたえ可能性をもたらす人

緑
心が純粋で恐れを知らない心のもちぬし

青
正義の心で悪を討つ正しい心のもちぬし

灰色
教師用であり、１．５倍強い

勉強ランク
これは、腕輪の武器に影響をおよぼす
Ａランク
すべての武器が使える
Ｂランク
Ａと同じだが攻撃力が落ちる
Ｃランク
近距離の武器のみで攻撃力が低い
Ｄランク
男子は、ナックルで守備力アップ（小）
女子は、短剣ですばやさアップ（小）
一年の場合は、中学の最終成績がランクを決める
二年の場合は、高一の成績
三年の場合は、高二の成績
留年生は、去年の成績で決まる
飛び級生は、特殊試験の成績

キャラ説明
主人公
徳岡　妄幻　（とくおかもうげん）
身長　１７０ｃｍ
年齢　１５歳
性格　真面目
勉強ランクＢ
得意科目　英語、国語、数学、理科
腕輪カラー黒
意味　友のための犠牲

武器デザイン
日本刀
サイズ１．５ｍ

ヒロイン
祈芽羅　曲孤　（きがらみこ）
身長　１６０？
年齢　１５歳
性格　少しぬけてる
勉強ランクＣ
得意科目
体育、地理
腕輪カラー
ワインレッド
意味
決意の証
武器デザイン
ヤリ（フリウリ・スピアー）
サイズ　２ｍ

徳岡希想　（とくおかきそう）
身長　１５５ｃｍ
年齢　１４歳
性格　騒がしい
勉強ランクＡ
得意科目
体育、保健以外
腕輪カラー黄色
意味
明るさ稲妻のごとく

武器デザイン
二丁拳銃
弾数　４０発　二丁あわせて８０発

川奈　緩奈　（かわなあやな）
身長　１７５ｃｍ
年齢　１６歳
性格　ものしずか
勉強ランクＡ
得意科目　すべて
腕輪カラー青
意味
静かなる闘志
武器デザイン
ムチ
４ｍ

教師

国語担当、１組担任　井口　野良　（いぐちのら）　２０歳
学長　天皇　龍次　（すめらぎりゅうじ）５７歳

キャラ説明　その他（後書き）

次回　新たな仲間

新たな仲間（前書き）

「おはよ〜レンちゃ〜ん」
「レンちゃん言うな！」
「そうだよ〜ミレナ」
「なんで？奏ちゃん？」
『はぁ〜』

新たな仲間

あれから、俺がクラスリーダーになった。
特にやることも無く平和な毎日・・・だと思ったのに・・・話は、
HRになる
「後二日でクラス対抗試合が始まります。クラス委員長の妄幻君と
副委員長の緩奈君、作戦を考えておいてください」
俺は、忘れていた・・。
「わかりました、考えておきます」
それで、今なのであるそこにはいつも？４人でいる
「おにぃ〜！どうするの？」
「そうだよ〜考えないとマジやばいって感じになるよ〜」
と希想と曲狐が自分には、関係ないな〜いって感じで俺に聞いてきた
「わかってるよ・・・・緩奈〜何か思いついたか？」
と聞いてみると・・・いなかった
「アレ？アイツどこいったんだ？」
二人は、知らないよ〜と言って首を振ってしまっている
「あれって緩奈さんじゃない？」
と曲狐が自動販売機の方にいる緩奈を見つけた
「お〜い！どこいってんだ？」
と駆け寄ると
「この子と話してただけだが？」
そこには、３人の女の子がいた
「紹介しよう。まずこの茶髪ポニーテールの子が藍沙佳夏連だ」
と茶髪ポニーテールの藍沙佳さんが
「はじめまして！夏連って呼んでな！」
と元気よく挨拶した
「次に、赤毛短髪の子が絹乱奏だ」
と赤毛で短髪の子が

「絹乱奏です。奏と呼んでください」
と奏さんが簡単に挨拶した
「最後に、アヴァン、ミレナ、フィルだ」
金髪に左右にある巻き毛が特徴である
「はじめまして〜ミレナって呼んでね〜」
と夏連に奏にミレナである
「はじめまして、一組の徳岡妄幻だ。よろしく」
と挨拶して他のメンバーも挨拶終わったみたいなので
「お前ら何組なんだ？」
ミレナが
「2組だよ〜」
そう言うと
「なら敵になるんだな」
「もちろん！」
「正々堂々勝負しようね〜」
そこでチャイムが鳴った
「また、今度会おうね〜」
だが次会うのがあの日だとは、誰も考えてなかっただろう
国語だったが、頭に入らなかった
「おい、妄幻！Ｐ５４を読め」
「はっはい！」
クラスのみんなから笑われた
それから昼までそんな感じだった
「おにぃ〜先生から総攻撃だったね〜」
と妹に背中をポンポンと叩かれた
「作戦会議をするぞ！」
「本気と書いてマジと読むって目だぁ〜！」
昼食を食べながらの作戦会議が始まった
まず、遠距離が7人中距離６人で１３人が近距離である
「無理わかんないよ〜おにぃ〜なんか思いついた？」

と妹が早くもギブアップ
「俺も思いつかない」
「私もむりかな〜」
「私もだ」
みんなリタイアであった
それから普通に昼をとり、雑談を始めた
「明日、放課後時間とってみんなで会議だな」
『さんせ〜い』
と二人は、同意
「私もいいわよ」
これで、みんな一致したため今日みんなに話すことになった
そして、ＨＲ
「みんな、明日の放課後残れる人だけでいいから作戦考えるの手伝ってほしい！強制じゃないから無理しないでいいから」
そして今日が終わった

新たな仲間（後書き）

次回予告
今日が作戦会議だ！
さて何人のクラスメートが協力してくれるか
クラス対抗試合の作戦会議

クラス対抗試合の作戦会議（前書き）

みんな協力してくれるのだろうか・・・

クラス対抗試合の作戦会議

さて今は、昼休みである
「今日は、何人来るかな？」
と3人に聞くと
「おにぃーがみんなを信じていればみんなくるよ〜」
「私もそう思うよ！」
「うむ、そうだな」
とこんな感じである
そして6時限目が終わりHRである
先生が短めに話終わり　いよいよである
掃除が終わりみんなが・・・席についたのだ！！
「おい！リーダー始めるぞ！」
と野呂が仕切り始めたので
「リーダーは、この俺だぁ！勝手に仕切るなよ！」
黒板には、2組撃破！と書かれていた
「よしまず、役割を決めたい！」
そう、狙撃と中距離と近距離で分けて一気に叩くのが作戦である
「なのでまず、狙撃班のリーダーを決める」
「みんな、佐々木が狙撃班リーダーでいいか？」
「俺っちにまかせな！」
勢いよく佐々木の右手が上がった
と聞くと・・・拍手が起きた
「よし！佐々木任せたぞ！」
おう！と言いながら席についた
「次に中距離班リーダーだが・・緩奈やってくれるか？」
そう、緩奈が一番強いしみんなが動いてくれそうなのだ
「いいわよ、みんなビシビシやるわよ？」
みんな、賛成したのでこれでOKである

「それじゃ、曲狐頼めるか？」
「妄幻君の方がいいんじゃないかな？」
みんなも同じ反応であったが
「俺は、総司令として先頭で戦うから曲狐に頼みたい」
教室が静かになった
「そうだね♪なら私がやるね！」
それで決まった
この後もいろいろあったがこれは、本番までの楽しみである
「よし！勝つぞぉ！」
『おー！』

クラス対抗試合の作戦会議（後書き）

クラスの団結によりいい作戦ができた１組

これで、２組を倒せるのか？

次回

試合開始！！

試合開始！！（前書き）

ーこれよりクラス対抗試合を開始しますー

試合開始！！

今、グラウンドである
これから、一年全クラスによる対抗試合である
作戦は結構いい感じである
「みんな、相手は2組で俺たちより組み立てやすい武器が中心だぁ！だけどあきらめないでいこう！」
おー！とみんなが勢いがある声と重なるようにブーとブザーが鳴り響いた
「よし！行くぞ」

相手は、女子が１４人で男子が１５人の２９人であるこっちより３人も多いのである
「試合準備を開始してください！」
ざわざわとグラウンドに陣が構成されていく
「では、試合開始してください！」
と合図と同時にブーと音が鳴った
「やるぞ～！［コード・トルネード］開始」
と命令とともに遠距離の弾幕と近距離部隊の突撃周りを中距離部隊が陣を作った
「ヤッホ～幻！この作戦崩させてもらうからね☆」
「一人で騒がないでください、夏連」
と奏と夏連がものすごいスピードで陣を二つに引き裂いた
「みんな！やるよ～ついてきて～」
とレイピアを持ったミレナの合図で大群が動き出した
「幻！メンバーの半分がやられたぞ！」
「安全な場所まで撤退してもう一回陣を作りなおすぞ！」
だが、このときすでに後１３人しかいなかった
「どうする？おにぃ～」

・・・
「無視しないで答えてよ！」
「わかってる！わかってるよ！何も考えが思いつかないんだよ」
そうもう９人である
『失望したたは、私たち突撃するから』
と曲狐と緩奈とクラスメートが突撃していった

(みんながやっているのに・・・・俺は・・・・俺は・・・・なんで・・・
・また一人やられたまただ、だけど
どうすればいいんだ)
そのとき、曲狐が飛んだ
「キャァーーーーーー！」
男子５人が迫ってる
隣では、男女２０人に緩奈と希想が囲まれた
「も、もう無理」
「私も、だけどあきらめないで」

ー俺なにやってんだよ！ー

ー仲間が助けをやる気のある俺を待ってるのにー

ーこんなところであきらめていいのかよー

ー選べよ！俺が選ばないといけない道を！ー

「なんだ、アレ？なんだあれ？」
そこには、二本の刀と怒りに満ちた目が相手をマークしていた

試合開始！！（後書き）

次回
２５人の生徒相手に一人で戦う妄幻
この後にある世界とは
ＢＲＥＡＫ！ＢＲＥＡＫ！！ＢＲＥＡＫ！！！

BREAK！BREAK！！BREAK！！！（前書き）

そこには、貪欲なオーラがあった

ＢＲＥＡＫ！ＢＲＥＡＫ！！ＢＲＥＡＫ！！！

「妄幻なの？」
「おにぃ？」
「妄幻君？」
と三人が似たような反応をとっていると
ものすごい勢いでまず5人を吹き飛ばした
「何だ！？アイツ！」
オラーーーっ！
と男達が向かってきた
次の瞬間
5人が倒れた
そして刀を軽く舐めて笑っている妄幻
「標的を発見・・・撃破する」
そして次々と撃破していく
「ちょっと！これどこのアニメよ！」
「こんな大逆転は、アニメだけにしてほしい〜」
ズシャーンと三人ごと倒した
そして妄幻は倒れた
「妄幻！」
「おにぃー！」
「妄幻君！」
と三人が駆け寄った
ブーとブザーが鳴り試合は、一組が勝利した

（みんながやられる！）

（俺が・・・俺が・・＊＊を助ける）

（絶対に・・・・絶対に）

（そしてみんなも・・・）

（そしてこれからも！）

（もう、迷ったりしない！）

（絶対に！！）

（だから・・証明する）

（この戦いでぇー！）

ＢＲＥＡＫ！ＢＲＥＡＫ！！ＢＲＥＡＫ！！！（後書き）

次回

戦いは、すべては妄幻の覚醒により手にした

そしてその後にあった未来とはー知らない天井、みんなの笑顔

知らない天井、みんなの笑顔（前書き）

終わった――負け――勝利――どっちなんだ・・・・・

知らない天井、みんなの笑顔

倒した？２組を・・・
お前がやらないから―
そんなこと言われるのか
あいつら最後の最後まで戦ってたな
あの時俺の手に二本の刀と漆黒の服――まるで〞悪魔〟だな

「おい！幻が起きたぞ！」
鈴木がなんか騒いでいる
「幻妄君！」
と曲狐が泣きながら部屋に入ってきた。それと
「妄幻！」
「おにぃ〜！」
みんな泣いていた―ここは保健室？なのか
「おおげさだろ〜俺は元気だぞ？」
笑顔で答えた
「心配したんだからね！いくら学校のイベントでも―」
どんどん涙が出てきて話せなく曲狐
「今度、休日買い物付き合いなさいよ！」
と言われたので
「わかったよ〜行くから！泣くなよ！な？」
「どうした？二人して」
二人からの目線が怖い非常に怖い
「私たちも何かきいてもらうからね！」
うんうん！と妹まで頷いてるし
「わかりましたよ〜ききますから怒るなよ」
とそこに
「妄幻君覚醒おめでとう」

「覚醒？」
「そう君の場合は、２本の刀と漆黒の服になる」
と井口先生が説明してくれた
「私たちにもあるの？」
と妹が乱入してきた
「ありますよ、覚醒は３段階です。１回ごとにそのスタイルに固定されます」
「なるほどな〜」
と納得していると
「今日は、もう休みなさい疲れたでしょうから」
「はい、ありがとうございます」
そして今日を終えた・・・

知らない天井、みんなの笑顔（後書き）

戦いを終えた妄幻たち
これからなにが待っているのか？
次回、勝利、戦いの後に

勝利、戦いの後に（前書き）

「妄幻君・・何があったの？」

「みんな・・待ってるよ」

勝利、戦いの後に

ブーーーーー
戦いが終わった・・・妄幻君が変な力を使って25人全員倒した
「緩！妄幻が妄幻君が・・・・」
もう止まらないよ涙が
「おにぃなら大丈夫だよ！」
泣いてるじゃない想ちゃんやっぱり中身は、中学生ね
「曲狐泣かないの重症でも1ヶ月の入院よ」
冷静だな緩＿なんであんなに冷静なんだろう
「そう・・・そうだよね！曲狐元気いっぱいだよ☆」
無理してるわね
無理してるな〜曲狐さん
「皆さん、妄幻君を保健室に運んでください」
とそこに
「さっきの何〜？」
「痛いな〜」
「強かったね〜」
と上から夏連、奏、ミレナである
「妄幻君大丈夫？」
「わからない」
「そっか〜」
「けど、妄幻君なら大丈夫だよきっと」
これから何があっても彼守ってくれるもの
絶対にね！
なんか・・・・もしかしてこれが恋なのかな？
そうか〜そうか〜

勝利、戦いの後に（後書き）

次回予告
平和な日常だったのもつかの間
またしても妄幻に試練が――
「私がいないってどうなってるの！？」
消えた曲狐
曲狐～？曲狐～？曲狐ー！

消えた曲狐（前書き）

「誰よアンタ達」
「・・・・」
「それ、ＤＢＢ！何年よ！」
「・・・・・・」
ボス
「目標を確保」

消えた曲狐

あれからすぐに復帰してみんなと楽しくすごしていた
「おはよ！緩奈」
「おはよう、妄幻　希想」
「おはよ～緩奈さん！アレ？曲狐いないの？」
そういつも俺たちよりも早く来るのだ
「まだ来てないようね」
「寝坊か？」
「そうかもね～」
とそこに担任がきた
「HRはじめますよ座ってください」
「皆さんに大事な話があります・・・祈芽羅さんが何者かにさらわれました」
ざわざわと教室が騒がしくなった
「それって誘拐ですよね！？」
「はい、ですが相手から警察に頼らず自分たちの力で助けに来いとメッセージがありまして」
確かにメッセージがあった
「ならやるしかないですよね！場所は？」
「横浜の赤レンガ倉庫前です」
みんながまたざわついている
「うちのクラスだけですか？」
と聞くと
「はい」
俺は、机をバンッ！と叩いた
「みんな！俺達で曲狐を助けよう！」
おー！とみんなが答えてくれた
「相手の戦力が不明だけど俺達にならやれる！」

そうだー！とみんなに気合が入ってくる
「決戦！横浜市！みんなやるぞぉー！」
『オー！』
そして俺たちの第2回目戦いが始まった

そして放課後まで話は、持ち越しである
そして昼休み　食堂である
そこには、2組の夏連と奏とミレナ達と一緒に食べている
「えっ！みーちゃんが誘拐されたの！？」
「そうなんだよ～こまってるんだよ～」
「相手は、1組だけを指定したんだろ？」
と夏連が聞いてきた
「そうね私達しか来ないように指定したわね」
緩奈がそう答えた
「これは、1組の問題だからですかね」
「たぶんね～曲狐さんをさらうなんて！」
「とりあえず、助ければ問題なしだろ！」
上から奏と妹である
そうだね～とみんな納得していた
そして放課後である
「みんな明日が決戦だぁ！
気合入れて作戦考えるぞぉ！」
『おー！』
作戦会議は、7時まで続いた
「よし！解散！明日にそなえて休んでくれ明日は、学校に6時集合な！」
『はい！』
そしてみんな帰っていった
「明日勝てるか不安だな」
「そんなに不安なの？」

と緩奈がやさしく声をかけてきた
「あんだけ、言ったけど不安しかないさ」
「おにぃらしくないな～」
「希想」
そこには、妹がいた
「私達がついてるから安心したら？」
と緩奈がそして希想が
「ありがとな・・・よしっ！帰るぞ」
「そうね、お姉さんも疲れたし」
「りょ～かい！☆」
そして俺達は、明日へ向かった希望と不安を抱えながら

消えた曲狐（後書き）

次回予告
今回の敵は謎の集団であるが曲狐のために勝利をつかめるのか
次回　決戦！横浜市
「いくぜぇー！俺達に不可能は、ない！」

決戦！横浜市（前書き）

「彼らのどこがいいんでしょう？」
「知るわけが無い」
「アイツらには、可能性がある」
「そうですか、いつか我々の見方になる方もいるのでしょうね」
「そだな」

決戦！横浜市

決戦――曲狐を助ける日
「みんな来てるな」
「いるわよ」
そこには曲狐以外みんないる
「みんな、バスに乗るぞ！」
みんな乗り込むと
「皆さん行きますよ」
『はい！』
そして1時間横浜赤レンガ倉庫である
「きたぞ！」
その言葉を合図に出てきた
黒い連中が数は、10人
「待っていたぞ妄幻」
中央の男がしゃべり始めた
「お前は、何者だ！」
「私は、コードネーム　スパイダー　お前らの学校の裏クラスｘ組みリーダーだ」
ざわついた　彼らは俺達の学校の裏クラスX組み？
「俺達と同じ学校なのになんでだよ！」
スパイダーじゃない人が話し始めた
「我らの指導者の命令よ。私は、ローズよ」
ローズと名乗る女性が前に出てきた
「指導者って校長のことか？」
また違うやつが
「自分で調べな、俺はドルフィンだ」
次は、ドルフィン
「もうはじめよう話すのも飽きた」

そしてその言葉を合図に始まった
俺の武器は、二刀流の刀に漆黒のコートにラフな服である
「突撃！」
おー！とみんなが走っていった
「10人私がやる」
とローズが
「俺は、3人」
ドルフィン
「我に続け残りをやる」
スパイダーと7人
「スパイダー！俺が相手だぁ！」
「いいだろう」
今の現状は、ローズに希想をリーダの10人
ドルフィンに野呂と鈴木と斉藤の三人
残りのX組みに緩奈をリーダーの12人
スパイダーに俺である
「まだ力を出し切れていない」
「俺は、いつでも全力だぁ！」
周りに巨大な穴がボコボコ空いている。悲鳴も聞こえてくる
「なんで一般人のいるところを選んだ！」
「それは、指導者に聞け！」
「また指導者かよ！アンタ！」
それから2時間他のところは相打ちだったり負けたところもいた
だけど相手は、残りスパイダーだけである
「これで残りは、お前だけだな」
「そうだが？」
これで最後どうしても一撃必殺ができない
「感情を高めてみろ」
いきなりスパイダーがアドバイスを言ってきた
「なんだよ！アンタも限界か！」

「そうだな」
感情を高める――曲狐を助けたい、いや！助ける！
「これで終わりだ！腕輪の意味を理解したよ！」
周りから貪欲な黒いオーラだが邪悪ではない、優しい黒である
「いいだろうこい！」
周りが吹き飛んだレンガが剥げ何もかも破壊した
そして雨が終焉を知らせた

決戦！横浜市（後書き）

次回予告
戦いは終わったすべては、光の中
次回　雨　終戦の後
一組には可能性がある育つか、育たないか楽しみだな

雨　終戦の後（前書き）

ザーーーーーーー
無残に壊れた赤レンガ倉庫
そこにいるのは？

雨　終戦の後

そこに俺は立っていた
仲間は、安全装置が起動したおかげで無傷である
「勝ったのか？」
ザーーーーーーーーーーー
「貴様は、力を使うことができた」
どこからか、スパイダーの声が聞こえる
「だがまだ１００％ではない」
どこからなのかわからない
「これからの活躍に期待しているぞ」
みんなが倒れている
「人質なら近くの船の中で寝ているぞ」
そこには、小さなヨットが停泊していた
「曲狐ー！」
ヨットに近くに行くとそこに寝ていた
「大丈夫みたいだな」
目を覚ました
「妄・・・幻？妄幻！助けに来てくれたの！？」
と涙を流しながら抱きついてきた
「みんなと一緒だ！」
そしてヨットから出ると
「みんな大丈夫なの？」
「もちろん！安全装置が効いてるからね」
そこに先生が来た
「みんなを車に乗っけて帰りますよ！」
それから１０分ごみんなを乗っけて
「みんな乗ったな・・・ヤバイ！警察が来るかも！先生車出して！」
そして学校に着いた

「みんなを保健室に運んでください」
「はい」
そして運び終わり曲狐と二人きりでる
「ありがとね！」
「俺達の仲間だからな！」
夕日がやけに綺麗にみえた
「それでも嬉しいよ／／／／これお礼ね♪」
チュッと頬に暖かい感触がこの日が忘れられない日になった
「おっお礼なんだからね！」
ぼ〜としていると
「行くよ！妄幻！」
「おっおう！」

雨　終戦の後（後書き）

次回予告
今回は、なんとか助けることができた
だが、今度はうまくできるか心配だな
それもだが次の相手は、教師だ勝てるのか？
ＶＳ教師
やるぞ！教師なんて楽勝だ

ＶＳ教師（前書き）

「校長先生！本気ですか」

「俺が嘘ついたことあるか？」

「・・・・無いです」

「第１回生徒ＶＳ教師！」

VS教師

あのX組との戦いから1週間がたった
新聞やニュースですごく報道されていた
「赤レンガ倉庫前です！このように無残な姿になっています」
とレポーターの後ろでボロボロになっている赤レンガ倉庫が映っていたりした
こんな感じで1週間をすごした
そしてまた一つイベントが発生した本当に飽きないクラスである
「今回、初めての生徒VS教師をやると校長先生が企画していました、やることになりました」
クラスが静かになって誰か話せよって感じの空気になった・・・なので
「先生！それ本当ですか？」
「本当です」
それに続いて緩奈が
「いつ戦闘ですか？」
たしかにそうである、俺達は最近戦闘が多く疲れている。
「明日だそうです」
みんなが固まった・・・そうだろう、生徒のこと無視な予定なんだから
「作戦考えておいてくださいね。私も敵なので今回は、参加しませんから安心してください」
それだけいって出ていった
「どうするんだよ~相手は教師だぞ！」
「たしか私達より1，5倍強いらしいわよ」
「マジで！？」
「勝てないよ~そんなの~妄幻君！何か作戦ないかな？」
「そうだよ！おにぃーは、リーダーなんだから！あるよね？さ・く・

せ・ん」
みんなの目線が俺に集中した
「すまん・・・無理です。今回は何にも思い浮かばない」
クラスのみんなが『だよな〜』とがっかりしていた
「まず！力の差が酷過ぎる！それに相手は、俺達が暴走したら止めるために訓練もしてるはずだ」
「そうね〜そのくらいは、覚悟しとかないとね」
うんうんとみんながうなずいた
「だけど、だけ〜ど！私達はX組に勝てたんだよ！」
そう俺達だけで一応勝った（？）のであるそう考えると案外簡単かもしれない
「みんな！作戦は、初戦で使ったやつを使う！だがうまく臨機応変に行動してくれ！後今日は、居残り禁止！早く帰って寝ること！いいな？」
『了解！！』
そして俺達の作戦が決まり日常に戻っていった
昼休みー食堂であのメンバーが集まった
「で？アンタ達は、明日先生達と戦うのよね〜ガンバ！」
「簡単に言ってくれるな〜夏蓮」
「だって関係ないしね！」
『そうそう』
と三人娘達は、こんな感じなのである
「まっ妄幻達ならやれるでしょ？あの誘拐の犯人倒したんだし」
そう倒した―いや訓練されたが正しいのかもしれない
「そうだな・・・やるだけだよな！」
「そうそう！」
とこんな感じで昼を過ごした

そして本番である今日の前には全9人の先生が並んでいる
そして中央に校長が腕を組んで立っている

隣には、幅が大人一人分ぐらいのデッカイ剣が地面に刺さっている
長さは４ｍである
他の先生を見ると
一人両手にガトリングを構えてる先生がいるあれは、杉岡先生である
うちの担任は、巨大過ぎるハンマーを持っている・・・某戦闘機が
人型になっり歌が勝利を導いたりするアニメに出てくる巨人がもっ
てそうなものである
「担任異常だろアレ」
みんなの顔が真っ青になっている
「これより1組VS教師の試合を開始します・・・・・試合開始！」
俺達は、うまく展開したつもりだったのに担任の超巨大ハンマーの
一振りでみんな飛んだ
「まだまだですね」
そして仕方ないのでX組との戦った時利用した作戦でやることにした
「作戦Xに変更！」
あの時と同じでリーダーと一騎打ちである・・・そう長さ４ｍで幅
２ｍ以上の剣を構えた校長に
「よう！妄幻！元気あるか？」
と笑顔で聞いてきた
「元気過ぎて大変だぜぇ！」
それは、イイネ～と言ってその剣を一振りしたその瞬間！嵐が起きた
俺は、２０ｍ飛んで校舎の壁に激突した
「もう終わりか？」
校長がつまらなそうに問いかけてきた
「まだ、本気なんてだしてないんだぜぇ！」
と言ってあの時みたいに全体に貪欲なオーラをだし力を全身に均等
に与えていく
「すごいね～若いからできるのかね～」
そして突撃したあの剣を素手で受け止め投げた2本の刀を先生に向
けて蹴った！

瞬間、担任の巨大なハンマーが直撃した！普通なら４ｍ以上飛んでるはずだが曲狐が先生の横腹を刺し緩奈が先生のハンマーを押さえつけたそして俺の刀の一本がハンマーに当たり砕けたそしてもう一本を改めてまた蹴りなおした！あの時俺は、２本を別々に蹴っていた一本を空中にそしてもう一つを先生にであるそして説明前の場面である

「やるじゃねーか妄幻！」

そしてブザーが鳴った

そうリーダーがやられたからである

「合格だぁ！一組！貴様達を1年代表として正式に任命する！」

そしてまた一つ戦いが終わった

ＶＳ教師（後書き）

次回予告

教師を撃破した妄幻達一組に新たな試練が近づいていた

次回、占拠された学園

どうなるのか・・・・一組の活躍に期待

キャラ説明　その他　？（前書き）

キャラ紹介などです

キャラ説明　その他　？

教師

国語　井口野良　(のぐちのら)　２０歳　男性

数学　原岡本木　(はらおかもとき)　４０歳　男性

社会(地理)　ノ呂原リョウ　(のろはらりょう)　３０歳　男子

理科　杉岡林　(すぎおかりん)　２０歳　男性

英語　ジョン・クロス　(じょんくろす)　５０歳　男性

体育　雪村真　(ゆきむらしん)　５０歳　男性

保健　坂岡美ノ　(さかおかみの)　３０歳　女性

副校長　磯辺蔦春　(いそべつたはる)　５５歳　男性

校長　天皇龍次　(すめらぎりゅうじ)　５７歳　男性

X組

男女１０人で構成されている
全員ＯＢで校長の命令で動く
ＤＢＢは、教師の０，５倍強く設定されている
このクラスは、校長しか知らない
メンバーは、全員コードネームで呼ばれる

メンバー

リーダー　スパイダー　男性

ローズ　女性

ドルフィン　男性

キャット　女性

サム　男性

ジョン　男性

ダイヤ　女性

ルビー　女性

パール　女性

サファイア　女性

キャラ説明　その他　？（後書き）

それでは、占拠された学園

占拠された学園（前書き）

「この学園にある機械をもらうとする」

占拠された学園

あの先生方からの無理やりのバトルを終え３日がたち俺達の傷が癒しが終わったころにまた問題である
そう校内放送から始まった
〔この学園は、俺達ロックが占拠した。もし反抗したらここをＣ４による爆破をおこなう！解除しようなんて考えるな数は、１万ある〕
クラスがざわついている！早く止めないと問題が起きる！
「みんな！落ち着くんだ！」
まったく聞いてない
「黙れぇーーーーーーーーーーーーー！」
バゴォン！と机をすごい勢いで破壊した。その机が吹っ飛ぶほどの力で
「よし！黙ったな・・・みんな聞いてくれ今回はみんなにＣ４の解除をしてほしい！」
そして先生が続いた
「皆さんのＤＢＢには、いろいろな状況にも対応できるように知識を与えてあります！それを使って対処してください」
その時俺は、なぜかアイツの名前呼んでしまった
「緩奈！お前は、俺と一緒に敵の無力化するぞ！」
みんなもビックリしていた
「いいわよ♪やりましょう妄幻」
それでは頼みますと言って俺と緩奈は、走りだした！
「前方に二人・・・いけるか？」
「これで１８回よ♪そろそろ覚えなさい」
そう確実に相手を潰しながら３０分近く進んだ
相手の武器は、Ｐ９０とＡＫ４７の二種類である
「ずいぶん装備が普通ね」
「そうだな、特にＡＫ４７なんて古くないか？」

「そうよね～レトロ好きなのかしら？」
さてこれで４０人である
ここまで以外にも簡単だった
とそこに敵の指揮官？らしき人が現れた
「動くなってボスの言うこと聞いてなかったの？」
「そうかもな」
「なら死になさい！」
両手にガトリングにセントリーガンを左右に展開されていた
「終ね！」
目を瞑ってしまった！だがいつになっても弾がヒットしてこない
目を開けると煙をあげた銃と巨大なハンマーに潰された女性がいた
「大丈夫ですか？妄幻君と緩さん」
『先生！？』
「無事みたいですね」
そう井口先生である
「その武器なんでもてるんですか？」
「ＤＢＢだからですよ」
「なるほでね」
となごんでいると
「Ｃ４は、解除完了しましたから。職員室に行ってください」
「わかりました」
職員室に行くと先生達が縄でぐるぐるにされていた
「よ！犯人グループのリーダーさん！」
「なぜ？ここに生徒がいる？Ｃ４を爆発するぞ！」
「解除済みよ」
犯人がガトリングを向けてきた
「馬鹿だろアンタ？」
「大人をなめるな！」
ダダダダダダァァァァ！！！
放たれた弾丸はすべて落ちた妄幻の刀により

「駄目だぜんぜん駄目だ！　遅すぎるぜぇ！」
そして緩奈が縄を破壊し犯人を確保した

占拠された学園（後書き）

次回予告
犯人を捕まえ学園を救った妄幻達
その後二人にしんてんがあったりなかったりそれは、貴方の目で確認してください
勝利その先の褒美

勝利その先の褒美（前書き）

「解決したな」
そうここは、学校の廊下である
そして隣には緩奈である

勝利その先の褒美

犯人を逮捕して事情を聞くとお金が欲しくＤＢＢの製作機械をいただく作戦だったらしい
「生徒がＣ４を解除できるなんて知らなかった・・・普通ならプロじゃないとできないのに」
凄いガッカリしているところに校長が
そして警察につれていかれた
「ＤＢＢは、いろんな生徒をプロに変える凄い腕輪だなめるなよ！」
「よし！ご苦労だったな〜妄幻に緩奈！」
と校長に頭をガシガシされた
「痛いですよ〜！」
「だけど、なんで先生が動かなかったんですか？」
と緩奈が聞くと
「俺達は、犯人の前だから動けば刺激するからな」
そうか〜と二人で納得していると
「すまんこれから警察にいろいろ話さないといけないからまたな！」
そして走っていってしまった
「ありがとな！緩奈がいなかったらここまでうまくいかなかったよ」
「いいのよ、別に一人じゃここまでうまくいかなかったわよ」
なぜか顔を少し赤く？したような感じになっている
「そうなのか？ならなんであんなに上手くいったんだ？」
なぜか呆れたようにため息をされてしまった
「なんだよ〜俺変なこと聞いたか？」
なぜか笑っているし女は、よくわからない生き物である
「それにしても妄幻は、鈍いのね」
「鈍い？俺が？？」
「そうよ、あなたは鈍い」
どこかでミスしたのか？いやしていないはずなのに

「どこら辺が鈍いんだ？」
またため息だ
「自分で考えなさいよ」
なんか意地悪な顔をしてきたので
「教えてくれよ～」
その時曲狐と希想が走ってきた
「仕方ないわね・・・ヒントよ♪」
キスをされた頬にである二人の顔が赤くなってものすごいスピード
で接近してきた
『ちょっ！チョット何キスしてるのよ！！』
「ヒントあげたからね」
「おっおう！」
「無視すんな！」
そうこんな感じで終わったのであるだがまだ試練がまっていた

勝利その先の褒美（後書き）

次回予告
事件事件で大変だったがまだ試練が残されていた
「みなさんテスト忘れていませんか？」
「え～！」
「なので次回は、テストです！がんばってくださいね」
「最悪だぁ～」

テスト（前書き）

終了です回答を回収します

テスト

俺達の地獄が終わった
「疲れた～なんでこんなことに」
そういまＨＲ終わりである
「だけど今回は、化学と国語と英語だけだからまだましでしょ？」
そう俺達のテストは、くじ引きで決まる
校長がくじを引きそれで出てきた科目がテストになるのだ
「だけど難しいな～特に化学」
とそこに希想と曲狐が合流した
「ねぇ～化学のベンゼンの化学式って何？」
と曲狐が聞いてきた
「Ｃ６Ｈ６が正解よ」
と緩奈が簡単に答えた
「さすがだな～」
「Ａランクは、伊達じゃないわよ」
そしてまた曲狐が質問してきた
「なら、これ教えて！
Ｎｅ　Ｇａ　Ｈ　Ｏ　Ｐｏ　Ｉ　Ｎａ　を原子量の小さい順に並べるやつ！」
「それは、Ｈ．Ｏ．Ｎｅ．Ｎａ．Ｇａ．Ｐｏ．Ｉの順番だな」
「違うよ～ＩとＰｏが逆だよ～おにぃ～ドンマイ♪」
と笑われたなら俺１点損した
「マイナス１点だね妄幻君」
「次これ！これって何？」
プリントには、長いプラスチックの筒が写っている
そうあの誰でもわかるあの物である
「メスシリンダーだろ？」
「そうね～」

『まさか答えられなかったの？』
「・・・・・テヘ☆」
「よし次だ！次だな」
「なら国語！これ教えて
相殺ってなんて読むの？」
「そうさいだよ」
と普通に答えると
「取引の利益で借金を相殺する　例文としたらこれが簡単だね！」
「例文は、書けたのに読めなかった」
なんかこれは、まるで●カ●スだな
「なんでそうなるのよ？」
「わかんない」
さてここまでくれば分かると思うがそう曲狐は、馬鹿なのである
「英語教えて！」
そしてプリントを見せてきた
「スペイン語を英訳せよね～たしか・・・ｓｐａｎｉｓｈだよな？」
「そうね、正解よ」
「なるほど～そう書くのか」
と曲狐が納得していたため
「どんな感じに間違えたんだ？」
「ｓｐｕｎｉｓｈって書いた！ａとｕを書き間違えたみたい」
と凡ミスだったので意外だった
あとあと～といいながら次の問題を探しはじめた
「これ！Ｔｈｉｓｔｈｅｄｏｏｋｓｈｅｌｆｔｈａｔｍｙｇｒ
ａｎｄｒｎｏｔｈｅｒｈｅｒｈａｄｕｓｅｄｒｅｇｕｌａｒｌｙっ
てなんて訳すの？」
「俺パス！緩奈～頼む」
ため息をつきながらはいはいとしぶしぶ答えてくれた
「これは私の祖母が愛用していた本棚です。が正解よ」
へ～と言ったと思うと

「これから遊ぼう！」
『はい？』
なんて言った？遊ぶ？曲狐は、あんなにできてないのに？
「いいけど、どこにだ？」
「もちろん・・・商店街！」
そして俺達は、近くの商店街を目指して坂道である桜並木を走っていった
「とうちゃーく！まずゲーセンでプリでしょ♪」
そして中に連れ込まれた
「いろんな機械があるんだな〜」
関心していると
「こっちだよこの機械オススメだよ」
となんか無理やり押し込まれた
「みんな〜笑顔だよ笑顔！」
と3人が凄い笑顔なので俺も負けずに笑顔を作った
そして撮影終了して落書きタイムがあるみたいだが3人に任せることにした
それからいろいろ見て回った
「もう6時だね」
「そうね〜なら解散ね」
「また明日な！」
「そうね！」
これで今日が終わった

テスト（後書き）

次回予告
「おにぃ～ご飯なに～？」
そうこの話の後話である
兄、男としての振る舞い

兄、男としての振る舞い（前書き）

よ～しおにぃゲット作戦スタート☆

兄、男としての振る舞い

あの後俺達は、家に帰り今から飯の準備である
「希想~風呂準備してくれ!」と妹である希想を呼ぶと
「は~い!おにぃ~今日のご飯なに?」
と聞いてきた
「今日は、パスタだよ…ってなんて格好してるんだ!?」
妹が凄い格好をして出てきた
露出度が高いのである
「何?どうかした?」
と何もないような感じなのであるまったく困った妹である
「もう少しどうにかできないのか?」
「えっ!おにぃ~は、これで満足できずに私に裸体になれと…」
と変なん妄想が妹をおかしくしているようなので
「とりあえず風呂よろしく」
は~いとなんかガッカリしながら風呂の準備に行った
それから妹は、部屋に戻り俺の料理の完成を待つらしい
「希想、食べるぞ~」
と呼んだら
「は~い」
また部屋から登場
「おい!妹よ…何故露出度が上がったんだ?」
「そうかな?気のせいだよ!」と完璧に露出度が上がった格好をしている妹がいた。
ちなみに、上が肩まで露出したダボダボの服に超ミニスカートである。
「早く食べようよ~」
と上目遣いで見てきた、その時知ってしまった…妹は、ノーブラであることを

「そ、そうだな！食べるぞ〜」そう、俺は男としての振る舞いを試されているのだと思った「相変わらず美味しいよね〜おにぃの料理♪」

などと言いながらも胸を少し強調している…無い胸を頑張って「そうか〜たしかに頑張ってるから少しは、マシなはずだからな！」

さて今妹は、風呂であるだがまた

何かやられたらやっかいなので「さっさと風呂入って寝る！うんこれが一番だ」

そして妹が現れた！下着にバスタオルである

「おにぃ〜「よっし！風呂に入って寝よう」

おにぃに逃げられた…

このままだとあの二人におにぃがとられちゃう！

「どうすればいいかな〜」

気がつくと朝になっていた

ちゃんと服も着てるし自分の部屋である。

「おにぃ、やっぱり好きだな♪」

兄、男としての振る舞い（後書き）

次回予告
クラスで委員会決めがあったそこで俺は、風紀委員をやることに!?
風紀委員の妄幻

風紀委員の妄幻（前書き）

さて始めるかな～めんどいな

風紀委員の妄幻

今回クラスで一人風紀委員を決めないといけないので俺が立候補した
「妄幻頑張ってね」
「おう！行ってくる」
と緩奈に応援されながら向かったのだったさて俺達一年は、二クラスなので二人である。
「よっ！夏連」
と前を歩く二組の藍沙佳夏連に声をかけた「！！なんだ〜幻かよ」
と凄く驚きながらこちらを向いた
「なんだは、ないだろ？」
とか話していると始まった
「この風紀委員の担当は、私だ」
そう校長なのである
それからいろいろと1時間も話しを聞かされやっと打ち合わせである。もちろんパートナーは、夏連である「そっちなんか問題あるか？」と聞いてみると
「幻の方こそ」
「ない（わよ）」
「だよな〜」
俺達のクラスでの問題は、無いのであるさてどうするか
「最近どう？」
「特に無いな〜俺達は、事件が終わるとのんびりしてるしな」そうと簡単に返事をされた
「そっちこそないのかよ」
「問題なんてあの爆弾事件ぐらいよ、そっちみたいに問題多くないよ」
そうだろうな〜俺達が異常なだけだよな…
「よし！今日は、ここまで！解散」

この言葉により今日のやることを終わった「そっちなんか問題あるか？」と聞いてみると
この言葉により今日のやることを終わった
「あんたこの後暇？」
「いや、妹の飯を準備する」
「大変ね〜そんじゃ！」
と二組に走って入っていった
「さて帰るかな〜今日は、グラタンでいいかな」

風紀委員の妄幻（後書き）

次回予告

風紀委員の仕事を終え一人家に帰った

一人飯

よし！今日は、楽だな～

一人飯（前書き）

さて楽するかな

一人飯

さて現在午後６時３０分
家には、俺一人なのである
「飯弁当でぃいか～」
そう今日は、妹がいないのである。
これは、放課後のことである
〈今日は、曲狐さんの家に泊まるから☆〉
らしいてか泊まるなら何故先に連絡しないんだ！
俺は、今家の前そしてコンビニは学校の近くにある２０分かかる距離である。
「希想！覚えてろよ～！」
と叫びながらコンビニまでダッシュした
息を切らしながらいえに帰り風呂は、シャワーですませ弁当を食べた
「普通にうまいのがムカつく」そして宿題を終わらせ暇なのでＰＰ３を起動した
「ゲームやるかな～」
ソフトは、過去にでたシューティングゲームの召集編らしい
だがすぐ飽きてしまう
次にグランツーリスモ４０をやることにした
「全部クリア済みだったんだな～」
そう、家にあるほとんどのゲームは、クリア済みなのである
「今まで起きた事件って校長がやったのか？」
Ｘ組の存在
指導者
「何が起きてるんだろうな～俺の頭じゃ理解できねぇ～」
だが一つ解ることがある
「これは、一組を狙っている」そうこれ以上の答えがあるだろうか
ーいやない

「みんなにももっと武器を使えるようになってもらわないとな」
時計を見ると10時を過ぎていた
「寝るか~明日も学校だしな」

一人飯（後書き）

次回予告
社会見学の班決めのために熱いバトルが起こる！
女の戦い

女の戦い（前書き）

『妄幻（君）（幻にぃ）は、私と行くの！』

女の戦い

さて今は、６時限目である
社会見学の班決めでまだ2つの班が決まってないのだ
「妄幻君とは私が行くからあなた達で班になりなさいよ！」
と曲狐が発言すると
「あなたはこの子と行ってあげなさい、私が妄幻のパートナーになるから」
と緩奈が反論して最後には
「私をお子様扱いするなー！」と希想が怒るこれでもう３０分使っている
「先生どうします？これじゃ決まりませんよ」
と先生に助け船を求めると
「なら、ＤＢＢで勝負して勝った人が妄幻君と同じ班でいいかな？」
「いいわよ～！二人まとめて倒してあげる！」
「あなた、自分の成績考えたら？」
「普通に考えたら無理でしょ！」
と二人から攻められる曲狐
「なら、無理じゃないこと証明してあげる♪」
そして場所変わりグラウンド
「緩奈さん！先に曲狐さんを片付けませんか？」
と交渉をもちかける希想
「いいわよ、先に片付けましょう」
何故か曲狐とアイコンタクトしながら答える緩奈
「それでは始めます！バトルスタート！！！」
その瞬間！緩奈の鞭が希想を捕まえた
「は、話が違うわよ！」
と状況把握が間に合わない希想に優しく説明を始める緩奈
「あなたを残すと後が面倒だから先に片付ける事にしたの」

と話終わると同時に槍がもの凄い勢いで飛んできた
「そんじゃ！お休みだね♪」
まず一人ダウンした
「こっからが本気の勝負よ！」二人が間をとり仕切りなおし
「さて本気でいくよ♪」
「どうぞ」
曲狐が突然してきた！だか
「遅い」
鞭により妨害され吹っ飛んだ
「もう終わりかしら？」
立ち上がった
「ま、まだ！まだやれる！」
そして構え直して、凄い勢いで飛んだ！光の線のようなものにみえた
「っ！追いつかない！！！」
その一撃により緩奈が敗北した「勝者！曲狐！」
やったぁ〜ともの凄い勢いで抱きついてきた
「一緒に楽しもうね！」
と凄い笑顔だった
「そうだな！」
これにより全部決まった

女の戦い（後書き）

次回予告
今回は、横浜の社会見学である破壊した赤レンガがどうなったか
社会見学その１

社会見学その１（前書き）

今日は、私が妄幻を独占できる♪

社会見学その1

現在俺達は、自分達が壊し他人に修理を任せた赤レンガにいる「ここまで修復したんだな～」と主犯である俺が言うと
「これにとどめの一撃やったのおにぃとスパイダーだもんね」と妹に言われ
「安全装置が起動しなかったらどうなっていたかしらね」
と緩奈まで俺を責めるのか！
「二人とも落ちついて、私は感謝してるかね♪」
と唯一の見方が現れた！
「ここらは、自由行動です。各班に別れて行動してください」と先生の一言により俺達一組が行動を開始した
「まず、赤い靴を履いた少女像のある公園いこ！」
「いいぜ」
いきなり曲狐が手を組んできた「お、おい！は、恥ずかしいから止めてくれ！」
だが曲狐は、わざとか本気なのか逆にもっと密着してきた
「どうかしたの？」
と真顔で聞かれたため
「腕組むの恥ずかしいから止めてくれないか／／／」
そしたら
「だ、ダメ？」
と涙目になった！女性は、卑怯である
「いや、いいよこのままで」
「やった♪行くよ妄幻君！」
そして着いてみると散歩している人や休んでいる人が多数いた「アレのことだっけ？」
「そうだよ～♪意外に小さいね～」
たしかに、イメージより少し小さいのである

「さて、ここで休んでから行くか？」
「そうだね！」
近場の芝生に座り海をみていた「今まで起きた事件どう思う？」
曲狐が考えながら話しだした
「私達を狙った犯罪それにX組の存在怪しすぎるね」
「もしこれが、校長がやったとしたらどう考える？」
凄くビックリしたらしく曲狐は、黙ってしまった
「俺考えたんだ、X組があそこまで動けるのって校長が何かしてる
からだと…それにDBBを使っていたし」
腕を強く握ってきた
「その考え私も同じだよ！だってあんなに事件が重なるなんてあり
えないもの」
それに…と言葉を詰まらせた
「どうかしたか？」
「それに、まるで私達を鍛えてるように見えるから絶対に怪しいよ」
と真面目な顔ではっきりと言ってきた
「そうだな…もう少し証拠を集めてから行動しよう」
「うん！」
急に眠くなってきた
「すまん、少し寝るな」
ヤバいもう限界に…
「チョット！寝たの？本当に？これって膝枕だよね！？」
そう手を握っていたのでそっちに倒れたのである
「仕方がないな〜お昼までだからね♪」

社会見学その１（後書き）

次回予告
寝てしまった妄幻と膝枕をしている曲狐さてお昼からどうなるのか
社会見学その２

社会見学その２（前書き）

「そろそろ起こすかな」

社会見学その2

あれから2時間ぐらい私達はゆっくりしていた
「妄幻君～起きてくれるとたすかるかな～」
と頬をつつくと
「い・・・今何時？」
と目をゆっくりと瞬きをしながら質問してきた
「え～と11時30分ぐらいかな」
「2時間ぐらいか？・・・・って！俺何かを枕にしてか？」
「私の膝だよ」
口をポカーンと開けたまま黙ったと思ったらあたふたし始めた
「えっ！膝痛くなかったか？」
「ぜんぜん痛くないよ♪」
「早くお昼食べに行くよ！」
と手を引いて走っていった
「どっどこ行くんだよ！？」
「ランドマークだよ！」
そして約30分かけてランドマークについた
「まず～モクデーでご飯にしょうか♪」
「わかった！」
そしてMが目印のバーガーショップに向かった
「ダブルビーフ！これ好きなんだよね～」
「俺は、トリプルフィッシュが好きだな」
それから俺達は、次に見るところを決めて進むことにした
「どこか行きたいところあるか？」
「とりあえず～最後に観覧車に行きたいな～」
なら残り3時間だな
「なら見て廻るぞ！」
それからいろいろ見ていると

「この雑貨屋みてもいい？」
「いいよ」
そしてなかをみると曲狐の好みにぴったりな感じである
「これ可愛いな～あっでも高いから無理だな～あっ！」
後ろから取り上げた
「これ欲しいのか？」
「うん・・・けど高いから無理なんだよね～」
確かにマグカップで３５００円
「なら買ってやるよ！」
俺の財布には2万ある
「えっ！？でも高いよ？」
「大丈夫だよ！」
さてレジに向かい会計を始めると
「プレゼントですか？」
と曲狐を示しながら
「そうですね～ラッピングお願いできます？」
「では、やりますね」
会計が終わり曲狐のところに戻り
「ほら！」
渡すと
「ありがとうね♪」
とこんな感じでそろそろ観覧車に行かないとまにあわない
「走るよ～！」
「ちょっ！待ってくれよ！」
１０分間走をしてやっとついた
「乗るよ～♪」
そして少したつと
「私ねその～・・・・」
「どうかしたのか？」
「妄幻君のことその～」

なんだろ〜マジで分からない
「す、す、好きなんです！」
沈黙
「はい？」
理解できない俺のことが好き？
「もしかして好きな人いた？」
「いやいないけど考えさせてくれ！」
ここで答えをだしていいはずがないと本能が止めてくるからである
「いつになるか分からないけどちゃんと答えだすから」
「いいよ！妄幻君が準備できてないのも当然だしいくらでも待つよ」
そして集合ポイントに行った

社会見学その２（後書き）

次回予告
さて私達の話ね
幻にぃ～を一人独占なんてずるいな～
女達（ガールズ）の行動（パーティー）

女達（ガールズ）の行動（パーティー）（前書き）

「予定どうりに頼むな」

「わかっている」

女達（ガールズ）の行動（パーティー）

「行くわよ」
と一人勝手に進む緩奈
そしてそれを追う希想
「どこ行くの～？てか歩くの速すぎ！」
希想の声を無視して喫茶店の前で止まるとそこで希想の方を向いて
「ここでゆっくりしましょう」まるでドラマなどに出てきそうな作りの喫茶店に緩奈が入ってしまった
「待って～」
店内はよくドラマに出てきそうなマスターがいる落ち着いた感じである
「マスター久しぶりね」
「そうですね…いつものですか？」
「そうよ」
なんと二人は、知り合いらしいまっ緩奈が常連でも違和感がないが
「カプチーノありますか？」
「ありますよ…」
「ならそれで」
渋い感じのかっこいい系のマスター映画にでても違和感がまったくない感じである
「ここでゆっくりしたら次どこいくんですか？」
「気分によるわよ」
緩奈的には、どこに行くなんてどうでもいいみたいなのである「できたぞ」
マスターが二人に注文したコーヒーとカプチーノを二人の前に置いた。凄くいい匂いがする
「美味しそう～いただきます！」と希想が目をキラキラさせながら飲んでいると

「この前派手にやりましたね」新聞の記事を見ながら緩奈に話かけてきた
「あれね…友が人質にされて委員長が暴走したのよ」
「敵の情報必要か？」
一瞬空気が固まった
「どこから手に入れたのかしら」
「いるのか…いらんのか」
マスターが敵か味方なのかここをミスすると相手に情報を与えるかもしれない
「鮮度」
「３日」
「高いのかしら？」
味方なのか…敵なのか
「無料」
「ならもらうことにするわ」
コーヒーを一口飲んでから…
マスターがゆっくり椅子座るそして語り始めた
「相手は、ＯＢである。そして指導者が不明だが男性である。今の在校生からも新たに増える確率があるのである」
なら皆、先輩になる
その先輩が何故私達に？
指導者の考えがよめない
「もし、そのＸ組に入るとしたらどんな人なの？」
「クラスリーダーがよくなると聞いている」
！！なら妄幻がなる確率が一番高い…私は二番目になるのね
「幻にぃがなるかもしれないの！！」
希想がもの凄い勢いで立ち上がった
そんな中二人は、冷静であった「可能性の話しなんだから落ちついて」
「だって、だって！…」

「落ち着いた判断ができない人は、奴らに負ける」
希想の言葉を止めたのは、マスターからのきつい一言だった
「相手は、プロで君達は、アマチュアだ。冷静をなくしたらどう戦う」
マスターの言ってる事に間違いなんて無い。
「なら、冷静な判断を使っておにぃを助ける」
その強い意志のこもった発言とともに流れる涙
止まることを知らないように流れ続ける
「わ、私絶対にぃ…絶対に！おにぃを日常から出してあげないんだからぁー！」
それからずっと泣き続けていた気がつくと夕暮れになっていた「さあ、合流時間まで後５分よ急ぎましょ」
「えっ！だけどまだお会計済ませてないよ！」
と慌てる希想そこにマスターが「もう済んでる。行ってこい」マスターの指に領収書が挟まっていた
「ほら行くわよ」
一人で先に店を出て行ってしまった
「あっ！待ってください！ありがとうございました！」
静かになった店内に足音が響いた
「お見事だったよ~さすがだね」
「本当によかったのか？」
その男が椅子に座った
「何のことだ？」
「あの娘のことだ」
「問題ないから安心しろよ」
「お前本当に校長らしくないな」
「俺の中の校長は、これなんだ後いつもの頼むな」
「あいつらがどう動くか楽しみだね~」
タイミングよく凄く黒いブラックが校長の前にだされた
「ナイスタイミングだな！」

女達（ガールズ）の行動（パーティー）（後書き）

次回予告

何！どうなってるの！２人の中が暖かい感じになってるし～

とりあえずもう夏なのよ！

教室熱いのよ～

なので次回は、熱苦しい教室　ね～

熱苦しい教室（前書き）

「クーラーが動かない」

「気温３５℃・・・・・」

『ありえな～～～～～い！！』

熱苦しい教室

さて社会見学から3日がたった
今日は、最も高い35℃をマークした
「地球おめでと~最高気温だってよ~よかったね~」
とダウンしながら愚痴ってると
「妄幻どうしたの?元気ないわね」
と後ろから涼しそうな顔しながら話しかけてきた
「熱くないのか?」
「ぜんぜん平気だけど」
と俺の前そう緩奈の席に座った
実は、席替えで教室の中央の後ろをゲットそして右が希想
左が曲狐で前が緩奈である
「あれ、二人いないけど?」
「あの二人なら奏達と話してるけど」
そういえばあの三人の出番なかったよな~
「あの三人もダウンしてるのか?」
「ミレナがダウンしてたわよ」
「一人だけね~意外に元気だな」
そこに校内放送がながれた
(現在校長がクーラーの管理機械を壊してしまったため明日までクーラーがつきません)
そして沈黙
『ふ、ふざけるな――――――――――!』
「話し変わるけど曲狐に告白されたの?」
「えっ!なんで知ってるんだよ!!」
なぜか緩奈の方が驚いてる
「本当に告白されたの?」
「緩奈知ってるから聞いたんだよな?」

完全に把握した俺は、冗談に真面目に答えて緩奈がパニックになっている
「どこで告白されたの？」
緩奈の目がガチだ
「観覧車だよ」
「返事はしたの？」
「してない・・・・本当に好きか分からないから」
「意外に真面目なのね」
そこに二人がやってきた
「おにぃ〜本当にクーラー動かないの？」
「校長が壊したみたいだぞ」
「明日って校長が話して夏休みだから、私達が使う機会ないかもね」
と曲狐が言ったなんかやけに俺をチラチラ見てくる
「そっか〜夏休みか〜みんなでいっぱい遊ぼうな！」
『うん！』
とそこに佐々木が走ってきた
「先生がみんな夏風邪でダウンして授業できないから校内で自由にしてろだって」
さてみんなをまとめるかな
「みんな！これから寝るのもアリだし自主練もＯＫだ！自由に行動していいぞ〜！」
『了解！！！！！』
さてクラスの半分がどこかに消え数人が爆睡している
「自由にするなら解散でいいのにな〜熱い・・・」
「そうだ〜Ｘ組の情報聞く？」
「どんな情報だ？」
突然のことに周りが静かになった
「よく行く喫茶店のマスターからの話」
みんなが真面目に聞いている・・ここまで真面目なのは、あの時みたいだ

「まず、OBってことね、次にクラスリーダーがX組に入る確率が高いんだって」
みんなの目線が俺に集中した
「お、おい！俺まだ一年だぞ」
「後、指導者のことなんだけど男性だって・・・これが新しく入った情報よ」
とそこに先生が来た
「今日は、ここまでだってさ～だから帰宅！準備できたら帰っていいよ～」
それだけ言って帰ってしまった
「それじゃみんな勝手に解散な」
ぞろぞろとみんなが帰っていった
「俺達も帰ろうぜ！」
「賛成！帰ろ～！」
そしてまた俺達の一日が終わった

熱苦しい教室（後書き）

次回予告
なんか平和に終わったな〜
次回は、長い校長の話だな〜ヤダな〜
ここの校長は、話が短いのよ
えっ！マジ！？
次回驚き！３分間の校長の話し

驚き！3分間の校長の話し　（前書き）

「夏休みか～意外に早くきたな」
「幻にぃ～！学校行くよ～！」

驚き！3分間の校長の話し

熱い・・・周りには、あんまり生徒がいないみたいだが、遅刻しているのかと心配になる妄幻と違い

「幻にぃ～今日終われば夏休みだよ！な・つ・や・す・みー！」

凄い元気であった

「異常に元気だな～熱くないのか？」

そうこの妹は楽しいことが近くになるにつれ元気がますのだ

本当に元気になるのだ

「あれ？門に先生がいるね～」

門に立っているのは、杉岡　林先生だ

『林先生、おはようございます』

なぜかいきがピッタリになってしまったやっぱり兄弟だな

「徳岡兄弟か、ここから体育館まで行け」

「直接ですか？」

「そうだ」

俺と妹は、門から体育館に行く途中に見慣れた3人が歩いていた

「よ！奏　ミレナ　夏連」

ダルそうにこっちを向いて挨拶してきた

「幻～元気だな～」

「妄幻さん元気いっぱいですね」

「幻君～元気だね～」

とやっぱり元気がない

「おはよ～みんな元気ないな～明日から夏休みだよ～！」

「お前が異常に元気なだけだ」

と言っていると

「幻！夏休みどうすの？」

「そうだな～多分いつものメンバーで会うかな」

「私達も混ぜて！」

「別にいいぞ～」
「てか誘う予定だったしね」
そして体育館に近くなったのでここでいったん別れた
「緩奈と曲狐どこにいるかな～？」
「おにぃ～！あそこにいるじゃん！」
一組の列の最後尾に二人が座って話していた
「おす！緩奈と曲狐」
「おはよう！妄幻君」
「おはよう妄幻」
と挨拶を済ませて座る
「おはよう～曲狐と緩奈」
「おはよう想ちゃん」
「おはよう想」
と話しているといきなり壁が開いてそこから先生達が入ってきた
「あそこにエレベーターがあって職員室に繋がってるの」
冷静に説明する緩奈にもビックリしたがアレはずるいな
「これより、終了式を始めます！最初に校長先生の話です」
まってましたと言わんばかりに走ってステージに上がりマイクを掴んだ
「明日から夏休みになる！みんな楽しくやってこい！新学期にまた会おう以上！」
とまた走って元のの場所に戻っていった
「約３分ね・・・前回より６分短くなったわ」
と時計を見ながらぼそりとつぶやいてたのを聞いたおれは
「前回が９分で今回３分！短いな」
それからいろいろな注意事項を聞いて約２０分がたった
「これにて終業式を終わります」
そんでぞろぞろと教師がエレベーターに乗って職員室に戻ってしまった
「さて帰りますか」

緩奈が立ち上がった
「帰っていいのか？」
「もちろん」
そして俺達は、学校を後にした
「夏休みどこで集合する？」
「駅前の広場に集合してその後にファミレスに行って考える」
「いいわね」
「賛成だよ♪想ちゃん」
「なら時間どうすか？」
『9時50分！』
「なぜユニゾン！？」
とこんな感じで夏休みを迎えたのだった

驚き！3分間の校長の話し　（後書き）

次回予告

さて夏休みにやることいっぱいだな～！

夏だぁ！海だぁ！孤島だぁ！プールだぁ！S■S●か！

夏だぁ！海だぁ！孤島だぁ！プールだぁ！S■S●か！（前書き）

夏だな～

夏だぁ！海だぁ！孤島だぁ！プールだぁ！S■S●か！

現在９時４５分天気は、晴天である。そして俺の到着した時には、緩奈と曲狐が到着していたのだった。
「遅い妄幻…罰としてお茶買ってもらおうかしら」
「俺だけかよ！？希想だって遅れたのに」
「想ちゃんは、別なんだよ～堪忍しなさい♪」
と二人から攻められていると後ろから追加で遅刻組がやってきた。
「みんな早いな～まだピッタリなのに」　「湊が寝坊したしね」　「仕方ないでしょ…眠たいの我慢できないんだから」
まったくこの３人元気だな～
「夏連、ミレナ、湊おはよう」
「遅刻した三人には、罰として私と緩奈にお茶を奢ること～いいかな☆」「拒否権ある？」
「ないよ♪」
とこんな感じでスタートした夏休み初日これからどうなるのかね～
さて場所変わりファミレスだ。
「そんで、夏休みどう過ごすんだ？」
「いい質問ですね～まず、孤島に行ってバカンスだよ！」
孤島だってよ～そこでバカンスね～
「いや無理だろ」
「行けるよ！私達とあまり変わらない高校生が行ったってこの本に書いてあるもん！」
その本が某団長様が無理難題をやってのける本じゃなかったらやれるかもな～
「なんで妄幻君は、変なん目で私をみるの？」
「なぜってそれは、曲狐が持ってる本のせいだな」
「なんでよ～面白いのに～」

「確かに面白いがこの本のように孤島に行けるわけがない！どこにそんな金があるんだ？それに知り合いに所有者がいるのか？」
「幻の言うとおりだな～さすがに無理だぜ」
夏連が珍しく同意してくれたおかげか、しぶしぶ諦めて次のネタにいきやがった
「なら、カラオケ１０時間耐久勝負！」
『却下』
皆の声が一つになった
「なら、映画三本はしごでどう？」
むっ！これは俺は、否定できない…昔４つ連続で観たからな…
「いやよ面白いのがないもの」
またしても皆がうなずくと
「なら…海行こうよ！」海ね～確かに海水浴場あるけど、水着あったかな～
「いいね！私は賛成！」女子メンバーは賛成らしいなら
「なら行くか～」
「珍しく同意したね！」「俺は楽しければいいと考えてるから反対なんてはなから考えてないぜ」そしてしばしの雑談後今日は解散してまた明日にすることになった
「宿題ちゃんとやっておいてよね～！」
とブンブン手を振りながら帰って行った
「あいつ元気だな～」「おにぃ～帰るよ～早く涼しいところに行きたいんだけど～」
「おう！なら帰るぞ！」

夏だぁ！海だぁ！孤島だぁ！プールだぁ！S■S●か！（後書き）

次回予告

俺達は、海にやってきた。そこは男の楽園だった

ビキニだぁ！スクミズだぁ！男の楽園

ビキニだぁ！スクミズだぁ！男の楽園（前書き）

水着パラダイス

ビキニだぁ！スクミズだぁ！男の楽園

さて俺は現在海水浴場にいる。周りは美しい女性であふれ俺の心を満たしていく
「さて、泳ぐぞ！」
『おー！』
さて、今回の水着達の紹介だ。
Ｎｏ．１　曲狐　白いビキニ
Ｎｏ．２　緩奈　黒の極限まで露出した水着
Ｎｏ．３　希想　学校指定のスクミズ
Ｎｏ．４　夏連　白の競泳水着Ｎｏ．５　湊　可愛いフリルがついた水着
Ｎｏ．６　ミレナ　緩奈の白版こんな感じで楽園なんだよ！楽園！
男の中で勝ち組だぜ！
「妄幻少し遅いわよ」
「緩奈が速いんだろ！って夏連も速いな〜」
実は説明してるうちに折り返して岸に戻ってきていた。まだ３人だけだが次に着たのはミレナだ
「４番もらったよ〜」
なんとも見た目と違い幼いミレナ…これがギャップ萌えなのか！？
「やっぱ速いな〜って幻遅いな〜私に抜かされてやがるし」
「なっテメェー！いつか絶対に抜かしてやるからな！」
と話していると、我が妹である希想がゴール
「おにぃ〜速いね〜私もう疲れたよ〜」
「バテるの早いな」
そしてビリの曲狐だ
「みんな早いよ〜全然追いつけないし〜」
とまぁ〜こんな感じで楽しんでいた。日頃のストレス解消もできていいもの見てもう文句なしだな「さてたっぷり泳いだら定番のスイ

カ割やらないか？」
「スイカ割なんて何年ぶりかしら…楽しみだわ」「スイカ割やってみたかったんだよ！早くやろうぜ幻！」
「スイカ割って何かな～？ねぇ～湊教えて」
テンションの高い夏連に懐かしむ緩奈知らないミレナと教えてる湊って感じで楽しんでいるとベースからスイカと棒を持ってきた曲狐と希想がやってきた。
「持って着たよ～このスイカ重いから美味しいかもよ～」
と希想と一緒に持ちながら笑顔にやってきた
なぜか希想が不満そうな顔しているが
「どうした？何かあったか？」
「いや…棒より銃の方が持ちやすいなって思っただけだよ～おにぃ」
はぁ？そんだけで不満なんかよ！
「ハイハイそんだけで不満な顔するなよ～」
「えっ！不満な顔してのる！？」
こいつ自覚なしかよさすが我が妹だな
「してるぞ」
妹が撃沈したようだがほっといてスイカ割の準備に取りかかる
「てか、これ誰が割るんだ？」
「今回初めての夏連が一発叩いて、それからミレナがやってみんなでこいつを食べる」
なるほどね～と納得している夏連その後ろでミレナが
「突きじゃダメなの？」そういえばミレナは、レイピアを使ってたな～だからってスイカを突いたらいろいろとグロイよな「ダメだぞちゃんと叩かないと！叩くからスイカ割なんだから」
「仕方ないな～なら叩く」
仕方ないらしぃ～俺なんか間違い言ったかな？
「準備完了であります☆」
とまるで某カエル宇宙人のような発言をしながら笑顔の曲狐
「よしっ！夏連目隠しと棒を装備せよ！」

「おう！わかった！」
さて上手く誘導して希想を叩かせるか
「回れ右！そして５歩前進して振り下ろせ！」
「了解！いくぜぇ！」　そして希想の前で振り下ろした棒は、見事に命中した…
「おにぃ～！夏連を使ってイタズラしない！」
そう手に持っていた銃に「なんだ希想か～ってなんでスイカの所にいるんだ？」
現状を把握しきれない夏連
「夏連これはおにぃが私の場所まで誘導してやらせたから、別に私がスイカを移動させたわけじゃないからね」
ふむふむとうなずくと棒を俺に向ける
「とりあえず、幻を殴るのが正しい選択なわけだな？」
「そうだよ♪」
えっ！なんでそうなる
「いや～久しぶりに人を殴るな～力加減忘れちまったぜぇ」
おい…待てそれって死ぬかもしれないじゃないか「確か相手を攻撃するときに～受けてみてこれが私の全力全力っ！って言うんだよな？」
「いや違うから！白い悪魔出さなくていいから」「ダメか～やっぱりユ●●君いないから？」
「その発言ギリギリだ！夏連ストップ！」
まっ結果を言うと殴られた。
そしてみんなでスイカにかぶりつく
「甘いな～！」
「これなら何個でもいけるかも！」
「女性の敵になりかねない旨さがあるから油断大敵だぜ」
と女子メンバーは、楽しんでいるが俺は頭が痛いんだよ！
「妄幻大丈夫？」
「なんとかな～まったく夏連のやつ手加減してほしかったぜ」

まだ痛む頭を撫でながらはなしていると
「妄幻君大丈夫？結構強く叩かれてたけど」
曲狐が心配そうにスイカを持ちなが近づいてきた「まだ少しヅキヅキするけど大丈夫だぜ」
安心したのか、笑顔になる曲狐やっぱりこの二人は優しいな～
「妄幻顔がにやけてるわよ」
「もしかして…えっちぃ妄想してたのかな～？」「なんでそうなる！俺は健全な男子だぞ」
とはしゃいでいると
「なぁ！夜に肝試しやらないか？」
「肝試しね～夏連いいとこ知ってるのか？」
「あの林の奥にいるらしいぜ」
「いいね！やろう！いいよねみんな？」
曲狐の笑顔につられて頷いてしまった
周りをみると相談していたそして
「いいわよ。やりましょう」
その声と共に人生初の肝試しをやることになった

ビキニだぁ！スクミズだぁ！男の楽園（後書き）

次回予告
夏連の提案により俺達は肝試しをやることになった
さて俺は誰と一緒に肝試しするのかね～
肝試し
でっ出た！

肝試し（前書き）

盛り上がるといいが

肝試し

さて現在夜１０時を過ぎたごろ俺は夏連と例の林を歩いている。
なぜ俺が夏連と組んでいるのかというと
「さて、クジでメンバーを決めるから引いてくれ」
俺の指示に従い皆がクジを引く
「それで、俺が最後に引いて…よし！みんな色確認してくれ」
え～と…曲狐が青で緩奈が緑色で希想が青でミレナが緑色で湊も同じで夏連が赤ってことは
「俺と組むのは、夏連だな」
「わかったぜ！幻の泣き顔拝ませてもらうぜ」
なぜか他のメンバーからドヨ～ンって効果音が似合いそうなオーラが出ていた
「一緒に行きたかったな～」
「たしかに…唯一の男子だしね～おにぃと一緒が楽しそうな予感がするもんね～」
「近いうちに独占するとしますか」
「肝試し楽しみだが、幻君も両手に花がよかったんじゃないのかな～？」「男ってやっぱりハーレムの方がいいのかね～」と最後の方がひどい言われようだが気にしない気にしたら負けなのだ
俺が葛藤してる間女性メンバーで話し合いがあったらしく、それにより順番決定して今にいたるのだ
俺達は、何事もなく平和に移動中だ
「これじゃなんもなく終わって肝試しじゃなくね？」
「そうだな…！なんだ～風かよ～脅かしやがって！」
「夏連って意外と怖がり？」
「な、なんだよ…べ、別に幽霊とか信じてるわけじゃね～よ！ヒャッ！」やっぱり怖がりだー俺が手を叩いただけで驚いてるし
「幻…死にたいの？」

ヤバいマジな顔になってやがるランク的には問題ないけど
「今は、勝負したくないからパスだ」
いろいろあったが折り返し地点に到着したところで問題が発生した
のだった
「なぁ~幻あそこに人いないか？」
「…！なんでアイツがいるんだよ！」
「知り合いなのか？あの黒服」
そうアイツだ黒服のX組みの立ち方からしてリーダーのスパイダー
「アイツは、X組みのリーダー、スパイダーだ！曲狐をさらった犯
人グループのリーダーだ！」
「アイツが…殺なら今だよ」
アイツの戦闘力は、教師と互角かそれ以上そんなヤツに勝てるのか…
「俺達だけで勝てる確率は、０に近い…正直勝てる気がしない」
そんな話しをしているうちに気づかれた！
「貴様は、何を望む？そのためになら何を犠牲にできる？」
「アイツ、本物じゃない？アイツがそんなこと聞いてくるやつじゃ
なかった」
「答えよ！貴様の望む物はなんだ！」
「俺の望む物…」
考えたこともなかった…ただ漠然と生きて…とりあえず学校行って
…妹の世話して俺が望む物…
「…！げ…！幻！」
「！大丈夫だ…アイツ誰なんだ？」
手には、ＤＢＢが装備されているけど復元されない
「決まったか！」
「答えるのか？幻！」
心配してくれてるみたいだな~夏連ってこんな顔できたんだな
「いいぜぇ！教えてやるよ！俺が望むのは、今この楽しい時間を共
にしてる仲間達との青春だぁー！」
静寂が戻った…そしてアイツの方を見ると消えていた

「消えたみたいだな…夏連大丈夫か？」

「なんとかね~イテテ足挫いただけだよ」

地面にペタリと座ってしまっているので仕方なく「帰るから、おんぶしてやるよ」

「う、うん／／／／」何故か顔を真っ赤にしながら背中に掴まる夏連

「どうかしたのか？」

「なッなんでもねぇーよ！」

その後ホテルに帰りみんなに報告して今回の肝試しは、終了した

肝試し（後書き）

次回予告
肝試しは、中止になったけど次のイベントは絶対に成功させてやる！
星観察（ｌｂｒｉｎｇ
ｅｓｉｒｅ）

星観察（ｌｂｒｉｎｇ　ｅｓｉｒｅ）　（前書き）

昨日のっていったいなんだったんだろう・・・・・

星観察（ｌｂｒｉｎｇ　ｅｓｉｒｅ）

さて今日は、また海に行こうと考えたが山に行くことにした
「みんな！虫網と籠もってきた？」
「大丈夫だ、俺が全部持ってるから前向いて歩かないと転ぶぞ曲孤」
「だいじょ～ぶ～☆転ばないからっ！わぁぁぁ！」
ドシン！と音をたててみごとに転んでしまったのであるまだ下がコンクリートじゃないのが救いだったのか曲孤はすぐに立ち上がった
「あらら～ズボンが汚れちゃったよ～」
ズボンにおもいっきり茶色の汚れがついていた
「凄く汚くなってるよ～曲孤ダサいの～」
「想ちゃん！ダサいって言ったな～！！怒ったのだ～！」
ヤバ！逃げる～とか言いながら追いかけっこが始まった
「幻～あいつらどんだけ元気なんだよ・・・」
「俺に言わないでくれよ」
二人は俺達を置いて山を駆けていってしまった
「私達も行きましょう」
みんなの同意しゆっくりと歩きだした・・・ここで異変に気がついた一人いないのだ
「あれ？ミレナどこいった？」
他のメンバーも知らないみたいだ少し待ってみるといた
「お～いみんな速いよ～」
結構遠くから走ったのか汗をかきながら呼吸が凄く乱れていた
「おいおい俺達そんなに速かったか？」
「速すぎだよ～」
やっと合流したがこれでは目的地まで行くまでに時間だけが過ぎてしまう
「仕方がないか・・・俺がおんぶするから夏連荷物頼んだ」
荷物を全部夏連に任せて俺は、ミレナを背負って山を登ることにした

そして休憩などをしながら歩くこと一時間やっと目的地にいた
二人は、目的地でプロレス技などを使用した戦闘をおこなっていた
「おっそ〜い！てかなんでミレナを背負ってるのよ！」
「ミレナの足じゃ時間が足りないからおんぶしたんだよ」
そして予定より遅れてスタートした虫取りが始まった
「なかなか捕まらないんだな〜みんなは、どうかな？」
曲孤は、えい！やっ！とかまるで剣か槍でも使ってるような声を出しながらがんばって虫を追っていた
綾奈は、じっと待ち虫がきた瞬間に網を降るというまるで武士みたいな可憐な技を披露していた
妹は、待て〜！とか騒ぎながら振り回しながら追っかけていた
夏連、奏、ミレナがなぜか三人で同じ虫を狙っていた
「みんないろんな意味で凄いな俺もがんばるか！」
それから時間たつのも忘れて一時に遅めの昼食にした
「今日の弁当は、俺の手作りだからよ〜く味わって食べろよ！」
はーいの声とともにみんな勢いよく食べ始めた
「幻の料理って凄く美味いな」
「当たり前だぜ！毎日作ってるからな」
などと話してるうちにみんな食べ終わってしまった
「今日は夜星みるんだろ？」
「そうだよ〜みんなで夏の星をみるんだよ！」
「なら早めに帰って夜に備えようぜ」
俺の提案により予定より一時間早い帰宅になった
帰りが下り坂だったのでミレナも好調なペースだった
「各自観察に必要な道具をもって駅前広場に集合でその後、出発だ」
『了解』
言ったが俺達、兄妹と夏連と奏は道具を持ってないから暇なのだ
「なぁ〜夏休みの宿題って終わった？」
と夏連がみなに問いかけた
「終わってないだろ〜だって初日から泊まりで遊んでるんだしな」

そう俺達は、ずっと遊んでいたのだそれで終わってる人がいるなら
予定決めた日に徹夜した人しか終わるはずが無いのだ
「まっみんなでやればすぐ終わるよ」
『だよね～』
そしてそれから40分ぐらいしてから綾奈と曲孤とミレナが戻って
きた
「さてみんなそろったわね・・・でもう出発するんでしょ？」
「そうだな、よし行くぞー！」
おー！とみなの声が一つになり目指す広場に向かった
それから1時間ぐらい歩くと目的の広場に着いた
「ここが絶好のポイントだ」
周りに街灯がなくまるで星を見るためだけにあるような広場だ
「結構暗くなってきたね～」
そして夜空を色鮮やかに彩る星が空一面に現れた
『綺麗～！』
みんながそれぞれに星を眺めてると想が
「みんなで星にお願い事しない？」
「いいね～！けど流れ星じゃなくていいのかな？」
みんなが悩んでいるので
「悩まなくてもいいんじゃないか？願うことが目的なんだからさ」
「幻らしいよね～」
「それじゃみんなで願い事を心のなかで言おうぜ！」
『せーの！』

星観察（ｌｂｒｉｎｇ　　ｅｓｉｒｅ）　（後書き）

次回予告
みんなそれぞれの大量の星に願いをのっけた
だが学生の俺達にはやらないといけないことがある！
宿題だ！
なので次回は、宿題　面倒だけどやらないとな

宿題（前書き）

さて夏休みの宿題をやるか

俺達の夏休みは、ずっと遊んでいた…そう遊んでたんだ！だから宿題なんてやってるはずがない！「ってことで夏休みの宿題をやるぞ」
「なにか説明がなかったような」
だよね〜ってみんな同意しやがって！
「お決まりってやつだ」了解です！ってみんなしてケータイをチェックして
「たしかにそうだよね〜みんなで終わらせちゃお♪」
「って！緩奈は、もう終わってたのか」
「昨日終えたわ」
そしてみんなで宿題をおわらせるべく協力した
俺達の宿題は、ワーク20ページほどなのだが綾奈のやつもう終わってるのだ。いつ終わらせたんだ？
「緩奈が終わってるなら答えわかってるんだし、先生として俺達の手伝いな」
「いいけど、作者さん…私ってそんなに影薄いかしら？」
《いやぜんぜん》
「ならなんで私の名前が綾奈になってるのかしら？」
後ろからゴゴゴォォォと黒いものが見えた
《アレ〜間違えてた？》そして鞭を回避して逃げ出した
「逃げたようね…」
そんなこんなで始まった夏休みの宿題。先生が先生なのでサクサク進み二時間後には半分以上終わっていた
「結構早く終わったな〜さすが緩奈が先生なだけあるな」
「あなた達が早くやっていればこの時間遊べたのよ」
緩奈に的確な指摘をされ反論のしようがない
「けどそれなりに楽しいよ〜奏ちゃんや連ちゃんに幻君達と会えたんだし」

『ちゃんずけ辞めろー！』
相変わらずのコンビネーションを披露する三人組である
「まっ確かにみんなと会えて楽しいのは、同じだしね！」
「妹よいたのか？」
「いたよ！酷いよ私の存在忘れるなんて〜」
あ〜いじめちゃいけないんだ！と曲弧から怒られみんなから笑われてといろいろと大変だった
「てかおやつの時間だよ〜食べようよ〜緩ちゃん」
「そういえば、誰か夏休みの初日に宿題先に終わらせろよ〜って言ってなかったけ？」
そういえば言ってたような…気がするけど思い出せない。
「誰かなんてどうでもいいよ〜おやつだよ緩ちゃん！」
相変わらずのマイペースのミレナは、おやつを待ちきれないのかそわそわしてるし…幼児かよ！
「はいはい、今持ってくるから落ち着きなさい」まるで母と子のような二人を見てると最近起きてる事件がまるで違う世界で起こったことのようにおもえる。
俺が少し緩んだ顔してると妹が
「どうかしたの、おにぃ？」
俺はただ何も考えずになんもと答えた。
それから緩奈のお菓子を堪能した、ショートケーキである。
「旨いな〜これって買ってきたのか？」
「違うわよ、私の手作りよ」
みんな驚いていた、ここまで完璧だと逆に悪いところを探す方が大変だ
「ここまで完璧ならどこに嫁いでも大丈夫だな〜それに比べて妹よ…」
緩奈は、顔を赤くさせながら何か言っていたが妹が騒いでるので何にも聞こえなかった。
「おにぃ！なんで私がまるで残念な人みたいな感じで話すのよ〜別

に私は、そこそこちゃんとしてるもん！」
と五月蝿ぃのではいはいそうですね～って軽くスルーすることにした
その後も緩奈の指導のもと宿題がどんどん終わっていく。
そして午後６時を過ぎたころ宿題が終わり解散となった。
「今日私あまり喋れなかった…」
「そんな日もあるよ～奏ちゃん」
奏がいつものツッコミを忘れるほどテンションが下がっていた
「おにぃ！今日は、ハンバーグね！」
と妹がよく頼む面倒なハンバーグを注文してきた。
「はいはい、仕方ないか」
「やったー！」

宿題（後書き）

次回予告

俺達は、宿題を終えて夏休みのビックイベントの夏祭りに行くことにした

夏祭り　お楽しみに！

夏祭り（前書き）

夏祭りか〜楽しみだな！

夏祭り

今日は、夏の定番イベントである夏祭りの日だ。毎年２０００人を超える人が訪れる。
「相変わらずの大人数だな～」
「この町唯一のビックイベンドだしね～おにぃ！絶対綿飴とリンゴ飴買ってよ！」
はいはいとかるく妹の話しをながし周りを見渡すと大量のカップルと家族であふれていた…いや一つこちらに向かって来てる三人娘を発見した。「幻～！速いな～てか他のメンバーは、まだなんだな」
「いつもより速いね～珍しく」
「まったく二人分の着付けをやってあげてたら時間が結構かかっちゃったよ～奏ちゃんも連ちゃんジタバタするし～」
と相変わらずの三人を眺めていたんだが、ふと疑問点があった
「ミレナってすいか割り知らなかったのに着付けできたんだ！」
そう、海に行った時にすいか割りの説明を受けていたからてっきり日本文化を知らないのかと思っていたのだがどうやら違うらしい。
「お母さんの趣味でやっていたのを教えてもらったんだよ～幻君それ自分でやったの？」
「妹のもあわせて俺がやったぜ！上手いだろ」
母さんが海外に行く前に指導してもらったのだ。母さんが言うには、可愛い妹に着物を着せないで夏祭りに行かせるなんてかわいそうなことしてわいけません！
とかなんとか言って俺に教えたのである
「プロにも負けない上手さだね～さすが！幻君だね」
と話していると、やってきた最後の二人だ
「いやいや、みんな早いね～集合時間の２０分も早いよ～」
「それだけ楽しみなのよ祭りがね」
これで全員集合したので出発だ。

一応説明しとくと、屋台の数が約６００店で踊りを披露するグループが１００組もあり花火の玉の数毎年、２４０００発も用意されてる超ビックイベンドがこの夏祭りだ。なのに名前がしょぼい普通に夏祭りなのだ。
「おにぃ？誰と喋ってるの〜？」
「大人の事情ってやつだ、気にするな妹よ」
なんだかんだでどんどん進んでいき、射的などがある遊等ゾーンにやってきた。
「ねぇ！みんなで射的やろ！？」
景品を見ると可愛い物から格好いい物まで多数的として置いてあった。
「いいね！やろうぜ、みんな！」
そして俺達は、一列に並びみんなで狙い始めた。「幻君、これって落としたら私の物になるんだよね？」
「そうだぜ、だから欲しい物をよーく狙うんだぞ」
ミレナは、自分の持ってたコルクを全部使って欲しい物を落として、ぴょんぴょん飛び跳ねていた「もぅ！この銃重すぎ〜私の体に合わないよ！」と普段から銃を使っている妹が怒りながらぬいぐるみを狙っていた。
「おい、そんなふうに狙ってたら…人の話しを聞かないからラスト無駄にするんだぞ」
「うるさいな〜！ならあれ落としてみてよ！」
俺は、妹が狙っていた大きいぬいぐるみを一度みて…深呼吸をした後的を見ないで落としてみせた「兄ちゃんやるね〜名前なんて言うんだ？」
「徳岡妄幻」
店のオヤジがニヤニヤしながら懐かしむみたいに徳岡か〜とボソボソって言ってるのが聞こえてきた。
「お前、親父にそっくりだな〜まるで落とすのが必然みたいな感じでやりやがるところがな…」

親父は、ここの常連らしく毎回大量に景品を取っていくらしい。射的をやってる時の親父と俺がそっくりなんて初めて知ったぜと新たな発見に酔いしれてると、隣から俺を呼ぶ声が聞こえた。
「幻〜私のも狙い撃ってくれよ〜あのＰ９０が欲しいんだよ〜」
結構でかい箱の近くに小さい的があり、それを落としたらゲットらしい。「まったく、俺の得意分野は刀なのにな〜よっ！」
見事に的にあて俺の目の前に飛んできたので、格好よくキャッチして
「オヤジ！景品もらっていくぜ」
とついつい決めポーズを普通にしてしまった
「親父と本当にそっくりだな〜ポーズまでそっくりだ」
その後も何個か景品をいただき次に食彩ゾーンに移動した。
「おにぃ！約束覚えてるよね！？」
たしか、綿飴とリンゴ飴を買ってやるって言ったやつだったな〜と思い出しながら
「覚えてるよ。しっかりとな」
今回は、ゾーンの入り口近くに目的の店があったから助かったぜ。前は、結構奥にあったから探すのに手間がかかったからな〜と思い出を回想していると、おにぃ早く〜と妹に呼ばれていた。
「慌てなくても無くなりなんてしないから、落ち着けよ」
早く食べたいんだよ！ともう我慢の限界らしい
「ほらよ。ゆっくり食べろよ」
「後、綿飴もだからね！」
わかってるよと言いながら、隣にある綿飴の店に行き妹に綿飴を渡した。「それにしても、結構いるわね…」
「ビッグイベントだからな〜去年より人が多いらしいぜ」
緩奈と話ながら、周りを見るとカップルが手を繋いで歩いたり、親が子に買ってあげたりといろんな人で溢れていた。
「幻！口開けな！」
と後ろから笑顔の夏連が何かのパックを持ちながら接近してきた。
「こうか？」

あーんっと口開けるとそこに熱々の球体が放り込まれた！それも結構デカいやつをだ。
「美味いだろ〜！このたこ焼き」
うーっう〜う！と言葉として成りたたない声を出すしかできなかった。
「夏連！殺すつもりか？たしかに、美味いけどよ！」
「そんな怒んないでもいいじゃない！さっきのお礼したかった、だけなのに…」
プイッ！と頬を膨らませて明後日の方を向いてしまった。とその時会場にアナウンスが流れた。
〔これより、１０ヶ所のステージで１００組のダンサー達の連続披露をスタートします！皆さんステージにご注目ください！それと、ダンサーをバックに花火も打ち上げますのでそちらも見逃しなく！〕
アナウンスの直後に１００組のダンサー達の一番目の人達が一斉に踊り始め、その１０ヶ所のステージを彩る花火もスタートした。
「綺麗だな〜幻！」
「そうだな…相変わらずの見事な花火とダンスだな」
俺達が話してると後ろから、曲弧が俺達の間に入り込んできた。
「また来年もみんなでこれるよね？」
「もちろん！」
気がつくとみんな各ステージに散っていて、俺と夏連だけになっていた。「ねぇ！幻…さっきの…ごめんね」
いきなりの謝罪にビックリしたが、すぐにわかった。
「別に気にしてないぜ。あの時の夏連可愛かったぜ」
バーンッ！と花火の音が響いていた。
「え？今なんて言ったの？」
「秘密だ」
「えー！いつか教えてくれるんでしょうね！」
いつかね〜いつになるんだろうかと考えてもなにも浮かばないから一応返答しといた。

「はぁ？まったく…幻のこと…な人達って大変だぜ」
花火で一部聞こえなかった。なんて言ったかすごく気になる。
「今なんて「秘密だぜ！乙女のな！」

夏祭り（後書き）

次回予告！

夏休みも終わり、いよいよ体育祭の季節になった。

なので次回は、体育祭練習

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2682q/

私立望標学園

2011年10月6日19時07分発行